

欧州馬術レポート

週刊 Gallop 2021年2月号掲載



日本中央競馬会所属

◆佐々紫苑

(さっさ・しおん)

1995年東京都生まれ。早稲田大学卒。2012年全日本ジュニアライダー総合馬術選手権優勝。15、16年全日本ヤングライダー総合馬術選手権連覇。20年4月にJRA日本中央競馬会入会。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

馬心伝心 —奮闘記part II—

佐々紫苑

Shion Sassa



前回ハミについてお話したときに触れた『ハックモア』の続編です。馬の口の中にハミを入れて、両端をつないだ手綱を持つのが基本的な頭絡の形ですが、ハックモアは口の中にハミを入れることを嫌がる馬に対して、口に何も入れないで騎乗したい場合に適しています。

通常と異なり、口の中にハミがないぶん、鼻や顎の部分に力を振り分け、バランスで馬を導かなければならないハックモアを扱うのはとても難しいことで

す。私のオランダのトレーナーでロンドンオリンピックの銀メダリストでもあるゲルコ・シュローダー選手は、メダル獲得時にハックモアを使用し騎乗していました。

彼いわく、「馬の顔の部分はとても繊細なんだ。全ての馬がノーマルなハミで乗れたらいいけれど、ハミと乗り手と馬の間には相性がある。僕の場合、ロンドン（ロンドン五輪時騎乗していた馬名）



五輪銀メダル獲得時、ハックモアを付けたロンドン号とともにいい笑顔のゲルコ・シュローダー選手（ゲルコ選手提供）

には試合初日や低いクラス、フラットワークをノーマルで乗るようになって、グランプリのみハックモアを使っていたけれど、コニャック（大障害に出ている大きな芦毛馬）にはいつでもハックモアを使う。大切なのは馬とのコネクションがとれるかどうかだよ」と教えてくれました。

プロの感覚を言葉で説明してもらうのは難しいですが、馬とのコネクションをとるために最適な馬具をチョイスすることも、トップライダーになるための大切な要素であることが分かりました。

Let's enjoy Dressage

高田茉莉亜

Maria Takada



アイリッシュアラン乗馬学校所属

◆高田茉莉亜

(たかだ・まりあ)

1994年東京都生まれ。慶應義塾大学卒。2010、11年に全日本ジュニアライダー馬場馬術選手権連覇。16年の全日本ヤングライダー馬場馬術選手権で史上初の4連覇を達成した。17年より日本馬術連盟アンバサダーライダー。

先日ドイツに大寒波が到来しました。降雪はもちろん、夜はマイナス20度ほどまで冷え込み、日中もマイナス10度前後という日々が1週間続きました。ご近所さんいわく、ここまで冷え込んだのは10年ぶりだとか。

冬場の馬たちは元気なので、トレーニング中はヒヤッとする場面もありました。私たちは馬が元気な現象を「馬が張っている」とよく言いますが、なぜ張るのか気になって調べてみると面白いことがわかりました。

アメリカの馬の行動学者の方の記事によると、野生の馬たちは体を温めるために飛んだり跳ねたりすることはなく、エネルギーを節約し、身を寄せ合い、雨や風をしのぐことのできる場所を探そうです。これはいつ食糧不足になるかわからない野生の馬だからこその行動ですよ。

逆に、私たちが乗っている馬たちは安定して食糧が手に入り、暖かくて安全な厩舎に暮らしているため、エネルギーを節約する必要がないんだとか。冬場に馬が張るのは、十分にエネルギー消費ができていないことのサインかもしれないそうです。

暑い夏はたくさん汗をかき、エネルギーを消費しますが、冬はエネルギーがたまりがち。放牧場が凍っていますし、コロナ禍で大会がないことで運動量も減っているため、気をつけながらトレーニングを続けていきたいと思います！



屋内馬場でも運動後に馬のヒゲと鼻水が凍っていました（笑）（本人提供）

参考URL：<https://thehorse.com/19534/why-are-horses-frisky-when-its-cold/>